

学習も行事も学年縦割りの活動で1年生の意識を高める

島根県 吉賀町立柿木中学校

全校生徒39人の吉賀町立柿木中学校では、小規模校の特性を生かし、生徒の主体的に学ぶ態度、基礎学力の定着を図る。自学自習の習慣付け、先輩との縦割り活動などで、学ぶ意欲や自信を付けさせ、地域でも高い学力を維持している。

課題

主体的に学びに向かう姿勢や挑戦する意欲を育てたい

島根県の西端にある吉賀町は、日本有数の清流、高津川をはじめとする豊かな自然に囲まれた山あいの町だ。中でも、柿木地区は有機農業の里として全国に知られる。吉賀町立柿木中学校は同地区唯一の中学校で、生徒は全員、隣接する柿木小学校から入学する。2012年度の生徒数は3学年計39人、うち1年生が11人の小規模校だ。12年度に赴任した常國芳文校長は、生徒と

地域の様子について次のように語る。

「本校の生徒は総じて素直で純朴です。生徒は地域の方々の温かいまなざしに見守られながら、落ち着いて生活しており、それが基礎学力の土台にもなっていると感じます」

学力も全体的に高く、特に現2年生は、3年前に始まった吉賀町内4校の統一テストで多くの生徒が上位に入る好成績を収めた。この背景には、隣接する柿木小学校の手厚い指導も影響しているという。

「年度ごとに学力差はあり、中には学習習慣が定着していない生徒も見られますが、ほとんどの生徒がきちんと前を向いて授業を受

School Data

◎1947(昭和22)年開校。あいさつができ、自ら学びに向かい、人との共生を図る生徒の育成を目指す。2005年から2年間、文部科学省の人権教育研究校の指定を受ける。河川水泳やしめ縄作りなど自然や文化に密着した教育を展開。



校長◎常國芳文先生

生徒数◎39人 学級数◎4学級(うち特別支援学級1)

所在地◎〒699-5301 島根県鹿足郡吉賀町柿木村柿木 682-1

TEL◎0856-79-2027

URL◎<http://www.iwami.or.jp/kaki-jhs/>

公開研究会◎未定

ける、しっかり聞くとといった基本的な学習習慣を身に付けて入学してきます。小学校の指導の影響が大きいと感じます」(常國校長) 一方、常國校長が課題として挙げるのは、生徒の更なる主体性の育成だ。

「主体的に学びに向かおうとする姿勢や自ら新たなことに挑戦しようとする意欲は、まだ足りないと考えています」

同校では、生徒の主体的な学びの姿勢を培い学力向上を実現するために、次の4点を重視している。①自信を付けさせる指導、②徹底した学習習慣の確立、③学年縦割りの活動による主体性の涵養、④学校全体で取り組む

生徒・教師の意識の醸成である。次からそれぞれを取り組みについて見ていく。

● 自信を付けさせる指導

徹底した復習で基礎学力を定着させ 1年生に自信を持たせる

学習に前向きに取り組むための原動力の1つとなるのは、「自分にも出来る」という自信だ。同校においても、1年生では学力面でできるだけ自信を付けさせる指導を重視している。

実は数年前、同校では生徒の無気力さや基本的な生活習慣の欠如が問題となった時期があった。その頃、赴任した1学年主任の江山薫先生は、そうした問題を改善していくには、基礎学力をしっかりと定着させて、生徒に自信を付けさせることが重要だと考えた。

「10年度の1年生では、入学当初から島根県教育委員会がインターネットで配信している復習プリントを活用して、小学校段階の学習内容に繰り返し取り組むようにしました。基礎学力を定着させてから、その年の『全国学力・学習状況調査』の小学6年生と同じ問題に取り組ませたところ、高い正答率となりました。これが生徒にとって大きな自信になりました」(江山先生)

その後、県の復習プリントの配信はなくなったが、江山先生が作成したプリントを使って、1年生段階の復習を丁寧に行っている。

その成果もあり、1年生で基礎学力がしっかり定着するようになっていくという。

特に学習が苦手な1年生に対しては、個別補習も行う。ある生徒は、「勉強を中心に見てほしい」という保護者の意向により、数学・英語を中心に継続的な個別補習を行っている。また、長期休業中も、一斉学習(後述)の後、校長室で補習に取り組んでいる生徒もいるという。

「定期考査の結果が毎回思わしくないと、学習だけでなく、学校そのものが嫌いになってしまう可能性もあります。最初は十数点でも30点、40点と得点が上がってくれば、達成感から自信を持てるようになり、学習に前向きに取り組めるようになると考えています」(江山先生)

● 家庭学習習慣の定着

1年生も3年生に提出させることで 学習への意識を向けさせる

基礎学力の定着によって自信を付ける指導と並び、同校が重視するのは、学習習慣の確立のための徹底した指導だ。その重要なツールが、全校で実施する「自主学習(自学)ノート」である。毎日、自ら教科を選び、最低ノート2ページ分を学習する。1日4、5ページ取り組む生徒も多く、定期考査前には週末だけでノート1冊を終える生徒もいるという。特徴は、ノートのチェックの仕方と提出方



吉賀町立柿木中学校校長
常岡芳文 つねくに・よしふみ
[Where there is a will, there is a way. 意志あるところに道はある]



吉賀町立柿木中学校
1学年主任。継続は力なり。生徒にも結果がすぐに出なくても続ける大切さを伝えたい」

法だ。自学ノートというと、担任が学級の生徒のノートをチェックするというのが一般的だが、同校では学年縦割りで班をつくり、班ごとに担当教師を割り当てる。具体的には、教師1人につき1年生2人、2年生3人、3年生1人と受け持ちの生徒を決めて、学年を超えて全教員でノートチェックを行うのである。そのため、提出先は縦割り班のリーダーの3年生。朝礼終了後、3年生が1・2年生の教室を訪れて自分の班のノートを集め、担当教師に手渡しで提出する。3年生を回収役としたのは、1・2年生にとって、教師よりも先輩を提出先にした方がきちんと取り組もうという意識が働くと考えたからである。この方法にしたのは、常岡校長の経験にある。

「前任校では、自習プリントをレタケーターに入れて生徒に持ち帰らせ、週1回、担当教師に提出させていました。しかし、週1回の点検では継続的な学習習慣につながらず、

中学1年生の良さを伸ばす

図 「自主学习ノート振り返りシート」

日	自己評価	担当者より	保護者印
4	毎日のノートを仕上げました！ まためがねから問題を解けるようになったのでうれしい。	とにかく1日の勉強量が増えました！ 毎日、頑張っていました。後日、成績の問題もよく解けています。	
5	なるべく教科書やノートを見ながら問題を解いてみました。	頑張って、授業中に積極的に発言していました。問題がわからなかったら、先生に質問して聞いてみるのがいいですね。	
6	練習問題を解くときは、必ずノートを見ながら解きました。	定期試験では、先生から質問を取り組んでいました。先生から褒められました。	
7	テスト期間中は、できるだけノートを見ながらテストをしました。	自分の勉強のペースがわかりました。テストのときは、自分のペースで頑張りました。	
8	理科の授業のノートが、少しづつ増えてきました。	自分の、理科の授業が面白くなりました。先生から褒められました。	
9	毎日に書いたことの復習ができて、うれしい。	毎日、復習ができています。先生から褒められました。	
10	自分のペースで勉強することができて、うれしい。	先生の授業が面白くなりました。先生から褒められました。	
11	今日は、テスト前にノートを見ながら勉強しました。	毎日、復習ができています。先生から褒められました。	
12	11日と比べて、11日のノートを見ることができて、うれしい。	入試に向けて、勉強のペースがわかりました。先生から褒められました。	
1			
2			
3			

「自主学习ノート振り返りシート」には、生徒が毎月、自ら自主学习ノートにどのように取り組んだのかを書き、担当教師が良い点を褒めたり、アドバイスをしたりする。保護者が子どもの家庭学習の様子を知る機会にもしている
* 同校の資料をそのまま掲載

月1回の振り返りシートで学習の状況を保護者にも知ってもらおう

提出されたノートは、担当教師が点検し、

積極的に取り組む生徒とそうでない生徒の差が生まれて、切磋琢磨する雰囲気をつくれませんでした。また、提出しない生徒に教師側が根負けし、指導の継続を諦めてしまう状況も生まれました」(常國校長)

そこで、同校では、「我が子」としてかわらうという共通理解を図り、生徒の提出を毎日確実に促し、全教師で生徒の学習を支援する体制とした。

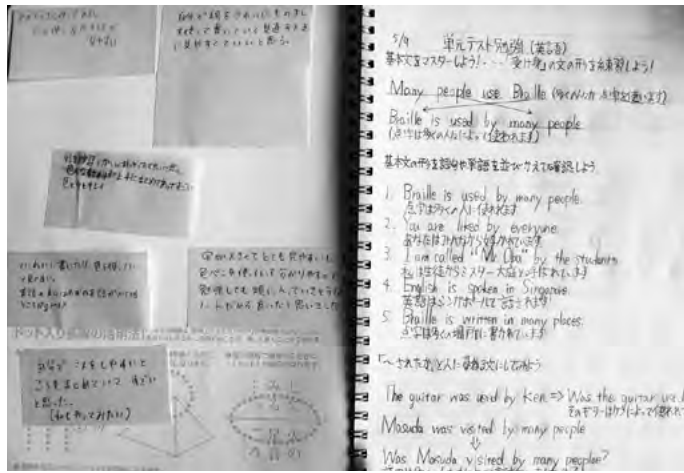
①ノートには必ず日付、学習時間、学習の目的を記入する。生徒が目的意識を持って、

「少しずつやる気が出てきたのはいいことだと思う」「英語や社会も徐々に取り組んでいこう」などの前向きなコメントを書き込む。教科の専門的なアドバイスを必要な場合は、「○君は方程式でつまづいているので、良い練習問題はありますか」と教科担当に聞いた上で書き込む。点検後は、担当教師が学年部のボックスにノートを入れて、集配係が各学年の生徒に返却する。

②家庭との連携を図るため、「自主学习ノート振り返りシート」を月1回提出する(図)。月末に生徒自身が反省を、担当教師がコメントを書き、保護者の検印をもらう。

③教師が出張などで不在となる場合は、担当の班を持たない常國校長と養護教諭、もしくは担当教師が所属する学年部が対応し、毎日確実にノートをチェックする。

また、学期に1回、クラス内で自学ノートの見せ合いを行っている。これは、友だちのノートを見て、良い点や参考になった点などを付せんに書いて貼るという活動だ。生徒は



写真「自学ノート」。生徒同士でノートを見せ合い、良いと思った点、まねしたい点などを付せんに書いて貼る。

友だちの指摘を受けて、自分の学習法の良さが分かると共に、友だちのノートを見ることで自分の課題に気付き、改善を図る（P.17写真）。

1年生には、自学自習の方法を習得するために、授業中に「ここは自学ノートにまとめておくといいよ」「自学ノートに表を書いておこう」というように、具体的なアドバイスをします。1年生のうちには自学自習の方法が分からない生徒も多いため、ヒントを出して、自学のコツを身に付けられるようにしている。

コラム 学校通信「とびのこ」



学校通信「とびのこ」には、生徒指導や人権教育、その他、常國校長が生徒や保護者に伝えたいメッセージが満載だ。編集・執筆は常國校長が行い、月1回発行する。学校行事の報告やPTA総会の案内など、基本的な情報開示はホームページで行い、学校通信では、学校として生徒・保護者と共有したい思い、生徒と地域の触れ合いの様子などを伝えることを目的とする。教育長や小・中学校、民生委員などにも配布したところ、地域の人々からも毎月届けてほしいという声がかかるようになった。現在も、学校と地域をつなぐツールとして機能している。
*同校の資料をそのまま掲載

● 学年縦割りの活動

上級生から教わることで
学校文化への意識が高まる

生徒の自信を高めるため、学年間の交流を日常的に展開しているのも、同校の特徴だ。

学校行事は、ほとんどを縦割り班で活動し、上級生が下級生を指導する。例えば、文化祭の最後を飾るソーラン節の指導は、代々、3年生の役割だ。1年生は先輩から学校文化を伝えられることで、伝統を受け継ぐ責任と誇りを感じ取っていく。

生徒会役員になりたいという下級生が多い

のも、憧れの先輩に少しでも近付きたいという生徒の思いの表れだろう。13年度生徒会の役員選出では、立候補する生徒が例年になく多く、出来る限り多くの生徒に役割意識と責任を持たせたいという思いから、役員数を増やした。

「先輩の生き生きとした姿を見て、『自分もあんな先輩になりたい』という憧れを持つことが生徒を大きく成長させるきっかけとなります。委員会活動を通して自治性を育みたいという先生方の意識が根付いてきていると感じます」と常國校長は評価する。

● 学校全体で取り組む意識の醸成

朝学習と長期休業中の一斉学習で
静かに学習に取り組む環境をつくる

このように、組織的な活動を成功させるためには、学校全体で学習に向かう雰囲気や醸成することも重要となる。

そうした雰囲気づくりの1つが、朝礼前の朝学習だ。8時10分からの10分間、職員朝礼の時間を生徒の自学自習に充てている。1年生には、この時に同一の課題を出し、週末に確認テストを行って基礎学力の定着を図る。

中学1年生の良さを伸ばす

例えば、ある週は数学の方程式の課題を出し、金曜にテストを行い、基準点に達しない生徒は、放課後、補習プリントに取り組みさせる。

「不合格者の多くは、放課後を待たず、昼休みに自ら補習プリントを受け取りに来ます。補習に参加して部活動に遅れると準備を上級生に任せることになるので、放課後の居残りは避けたいと強く思うようです」（江山先生）

長期休業中には、部活動前に生徒全員が集まり一斉学習を行う。夏休みは7時45分から、冬休みと春休みは8時から1時間、宿題や町の統一テスト、学力テストに向けた学習に取り組む。

「長期休業中は、学習時間が確保しやすいと思いがちですが、実際には、生徒は朝早くから部活動の練習をし、家に帰ると疲れて寝てしまいます。中学校はとかく部活動が優先になります。部活動が始まる前に1時間、学習に落ち着いて取り組ませることで、生徒に『まずは勉強』という意識が根付いてきていると感じます」（常國校長）

①学習、②委員会、③部活動と活動の優先順位を明確化

学校全体で学習への意識を醸成するためには、教師の意思統一も欠かせない。同校では、①学習、②委員会活動、③部活動と、生徒が取り組むべきことの順序を明確にし、教師間で共通理解を図っている。

部活動の優先順位は相対的に低いが、決して部活動を軽んじているわけではない。同校の実績を見ても、陸上部は郡内トップクラスの実力であり、バレーボール部も近年、力を伸ばしている。卓球部は、12年度に石見地区大会で初優勝を果たした。

「学習と部活動のめりはりをきちんと付けることで、部活動に対する集中力も高まっているのではないのでしょうか」（江山先生）

12年度には校長・教頭も含めた教師全員が授業を公開する取り組みも始めた。常國校長も英語の授業を行い、教師全員が参観した。

「生徒に単に学習しなさいと言うだけでは、説得力がありません。授業公開は、先生たちも勉強しているのだから、君たちも頑張りなさいという、私たちからの生徒へのメッセージにもなるのです」（常國校長）

12年度、常國校長は「故郷を愛し、礼儀を重んじ、確かな学力を備えた、自他の人権を尊重する生徒の育成」を教育目標に掲げ、特に、あいさつ指導や人権教育にも積極的に取り組んできた。

「本校には、一対一では自分からあいさつが出来ても、集団の中に入ると先にあいさつが出来なくなる生徒が見られました。自分以外にも行動する人がいると、どうも他人事になっってしまうようです。生徒には、集団の中でも自らあいさつや行動が出来る『型』を身に付けさせたいと思っています」（常國校長）

常國校長が考える1年生に大切な指導

教育に派手な取り組みは必要ありません。大切なのは、漫然と指導するのではなく「指導し切る」ことです。優れた取り組みであっても、尻すぼみになっては意味がありません。大切なのはシステムや言葉ではなく、根負けしない継続的な実践ではないでしょうか。教師が、これを持続していけば確実に力が付くと信じた取り組みを、地道に、確実に続ける。生徒が諦めたりだらけたりした時は信念を持って「続けなさい」と諭し、成果が出た時は「よくやった」と励ます。一連の過程を経た後に、生徒は学ぶ楽しさに出会うと信じています。

こうした取り組みをどこまで徹底できるかは、教師にどれだけ「我が子のように生徒を見守る心」があるかだと、常國校長は説く。

「学習指導にせよ生徒指導にせよ、大切なのは、どれだけ教師が生徒に『あなたのことをもっていきます。しっかりと頑張りなさい』というメッセージを届けられるかだと思っております。自分が期待されると感じれば、その思いは真綿に水がしみ込むように生徒の意識に浸透していきます。『自分は見捨てられない』という素直な心が、学びに向かう素地をつくるのです」（常國校長）